

「針」は「手」、「麓」は「足」・・・——日常言語とレトリック

言語表現の多くは、それが本来持つ意味に対応した言語外世界の事物を指し示すのに用いられますが、中にはそれとは異なる使われ方をする表現もあります。次の例を見てください：

(1) さびしさは鳴る。耳が痛くなるほど高く澄んだ鈴の音で鳴り響いて、・・・

(2) You are my sunshine, my only sunshine. You make me happy when skies are gray ...

(1)は小説家・綿矢りさの芥川賞受賞作『蹴りたい背中』(2003 年)の冒頭部分、(2)は Jimmy Davis and Charles Mitchell の名曲 *You Are My Sunshine* の歌詞の一部ですが、この「鳴る」、「sunshine」という語はそれぞれその本来の意味に対応した事物を指示対象とした使われ方とは違った使われ方をしていると言えます。すなわち、これらの表現は通常の[本来の／文字通りの]用法とは異なったレトリカル(rhetorical, 修辭的)な用法であることとなります。レトリカルな表現は詩歌を初めとした文学作品では一般的なものです。日常言語のおなじみの表現の中にも種々の慣習化されたレトリックが見られます。たとえば、次の例を参照：

(3) A clock has three *hands*.

(4) He lives at the *foot* of a hill.

(5) He is such a *cold* person. (Lee 2001: 6)

(3)は「時計には3本の針がある」ということで、‘hand(s)’は文字通りの「手」ではなく「(時計の)針」のことを指しています。(4)(5)は「彼は丘[小山]の麓(ふもと)に住んでいる」「彼は非常に冷淡な[冷酷な]人だ」ということで、‘foot’, ‘cold’はそれぞれ本来の／文字通りの指示対象(「(身体部分としての)足」「(天候が)寒い、(温度が)低い」とは異なる事物を指すのに用いられています。このように、ある事物(「(時計の)針」「(丘・山の)麓」「(人柄が)冷淡な、冷酷な」)をそれとは別の領域(「身体部分」「天候・温度」)に属する事物を用いて表したものをメタファー(metaphor, 隠喩)と呼びます。われわれが普段接している言語表現の中には種々のメタファーが見出されますが、現代メタファー論の古典である Lakoff and Johnson (1980) で有名になったものとして、「議論」を「戦争」の枠組を用いて表すメタファー(ARGUMENT IS WAR)があります。次の(6)–(8)はこのメタファーに基づく表現の例です(Lakoff and Johnson 1980, 2003: 4)：

(6) He *attacked every weak point* in my argument.

(7) His criticisms were *right on target*.

(8) I've never *won* an argument with him.

日常言語におけるレトリカルな表現には他にもいろいろな種類のものがあります。その一つにメトニミー(metonymy, 換喩)と呼ばれるものがあり、これはメタファーと並ぶ重要なレトリックのカテゴリーです。次の例を参照(Lakoff and Johnson 1980, 2003: 36, 38)：

(9) We need some *new blood* in the organization.

(10) He bought a *Ford*.

(11) *Napoleon* lost at Waterloo.

(12) *Hollywood* isn't what it used to be.

(9)では‘new blood’は文字通りの「新しい血」ではなく、「新しい人たち」を指します。この場合「血」と「人」は「部分」と「全体」の関係にあるとすることができます。同様に、(10)(11)(12)の斜体部分はそれぞれ「フォード社の車」「ナポレオンの率いる軍」「ハリウッドに象徴されるアメリカの映画界」を指しており、これらにおいて「その文字通りの指示対象」と「この場合の指示対象」はそれぞれ「生産者」と「生産物」の関係、「支配・統率・指図の主体」と「支配・統率・指図の対象」の関係、「ある場所」と「その場所と関係づけられる組織・事物」の関係にあると言えます。このように「部分」と「全体」とか、「生産者」と「生産物」とか、互いに関係が深く(広い意味で)概念上同じ空間・領域に属していると思わせるものの中における指示対象の変動に関わるのがメトニミーです。

日常言語のレトリックのカテゴリーには、他にシネクドキ(synecdoche, 提喩)と呼ばれるものもあります。これは、同じ集合の中で指示対象がその集合の「全体」と「部分」の間で変動することに関わるものであり、メタファーやメトニミー同様広く見られるものです。次例を参照：

(13) 上野公園は今週末は花見の人たちで賑わいそうだ

(14) 4号車でお客様のご案内中です

(15) 価格改定のお知らせ

(13)の「花見」の「花」は通常は梅やバラではなく、「桜」のことを指しています。(14)の「お客様」は客ならば誰でもよいというわけではなく、通常は「乗降に介助を必要とするお客様」のことを指します。(15)の「価格改定」は通常は「価格を低い方から高い方に改めること」を指します。この(14)(15)は一種の婉曲表現(euphemism)であると考えることができます。